

### 服部 力

服部都市建築設計事務所 会長  
(1級建築士、工学博士)

1975年のオイルショックで、世界経済は混乱した。わが国の経済も暗雲が立ち込めていた。私は以前から「もし自ら設計事務所を開く場合には『不況時』に開設しよう」と心に決めていた。なぜ不況時か。それは誕生したばかりの企業は、試行錯誤しながらヨチヨチ歩きで運営せざるを得ない。もし、世間一般の経済成長の速度が速ければそれについて行けなくなる。不況でスローな動きであれば、新米企業もゆっくりと成長できる。そんな思いがあったからだ。

然の産物でしかなかった。事務所を開設して間もなく、ある邸宅の設計話が持ち込まれた。それは地元財界人ご令嬢夫妻の「住まい」の設計・監理業務だった。英国帰りの三



## 大邸宅設計50件、その重責と醍醐味

西欧風の個人住宅

十代前半のご夫婦で、ロンドンでの魅力に惹かれ、現地から持ち帰った「The House Book / in England」なる分厚い本を渡された。「まずこれを読んでください。2カ月後に設計条件を出します」と。すぐに辞書を片手に英語で書かれた本を読み、建築主の要望に応えられるよう準備を進めた。出された設計条件は、1階は玄関、居間、テラス、食堂、台所を一直線上にすること、2階は寝室中心の間取りで、大きなクローゼットや庭の見える広いバルコニーがあること、赤いレンガの外壁仕上げで、テラスは広く、タイル貼りしてほしいとのことであった。

英語の書物を読んだおかげか、設計はそれ程難しいものではなかった。完成した邸宅は当時としては一風変わった西欧風の邸宅で、地元では評判になった。これを契機に、个性的で総工費が「億」を超える(3億〜6億円程度が多い)豪華住宅をこれまで50件程度設計させてもらった。富裕層の建築主からは「バリールヒルズの中心部に建つライトのコンクリート住宅を見て来てほしい」など、予想外の注文が来る。その度に私は喜んでそこに足を運び、設計の参考にした。住まいはその建築主のプライバシーそのもので、隠し金庫の位置やトイレの使い勝手、持病のための施設配置なども相談される。こつした極秘事項に配慮、細部まで建築主に満足してもらえる住空間をどう提供していくのか。住宅に対する豊富な知識はもちろんのこと、最も必要なことは「顧客との信頼関係」だと、つくづく思い識った。